実践報告

子供とともに学ぶ教員

～附属小学校での音楽科の授業を振り返る～

* 小塩　さとみ，** 早坂　英里子

Learning with the Children: Reflections on Teaching Music Class at the Elementary School Attached to Miyagi University of Education

OSHIO Satomi and HAYASAKA Eriko

要　旨

本論文は，音楽部に所属した附属小学校の教諭が，在籍した３年間の授業を振り返り，実践を重ねる中で音楽を教えることの意味とその方法について考察した記録である。全体は５節からなる。「１」と「５」については研究協力を行った大学教員が執筆して本論文の位置付けを示した。「２」から「４」は附属小学校の教諭経験者が執筆し，各年の授業実践を２つずつ，合計６つの授業実践を振り返った。取り上げた授業は歌唱（２つ），音楽づくり（３つ）とコロナウイルスによる休校期間に制作した動画授業である。これらの実践を振り返りながら，３年間の授業観の変容と，音楽の授業の在り方についての考察を述べた。

Key words：小学校音楽科，音楽づくり，聴く力，表現する力，協働的活動

１．はじめに

教員養成大学では，附属学校の教員と大学教員が協力して研究を行う機会が多い。大学教員にとって附属学校との研究協力は，自分の専門領域と関連する題材が学校現場でどのように活用され得るのかを実地で知ることができる機会である。加えて，附属学校の教員が，研究重視の環境の中で授業に向き合い新しい視点を獲得していく姿を間近で目撃する貴重な機会でもある。本論文は，音楽部に所属した附属小学校の教諭が，在籍した３年間の授業を振り返り，実践を重ねる中で音楽を教えることの意味とその方法について考察した記録である。全体は５節からなり「１」と「５」については研究協力を行った大学教員（小塩）が執筆し，「２」から「４」を附属小学校の教諭経験者（早坂）が執筆する。

２．附属小学校の研究教育環境

教員として附属小学校１年分の学びは公立小学校での３年分の学びに匹敵すると赴任時に言われた。実際に附属小学校での３年間は，日々の授業に加え，研究推進のための授業実践（春と秋に実施される部内授業，全校授業），前期と後期の教育実習，教育実習生に教科の指導の在り方を示す指導授業や指導講話，公開研究会など，授業を実践しては振り返り，振り返っては次の授業を実践し，いつも授業のことを考える日々であった。他の人の授業実践を見る機会も多かった。各

＊　宮城教育大学教育学部
＊＊　大崎市立川渡小学校

教員が校内の教科部に所属するので，その教科について深く研究し，部内授業や全校授業，公開研究会の前には教科部内で実践予定の指導案について何度も検討を重ねたり模擬授業を行ったりした。他の教科部の部員と職員室や同じ学年の教室などで語り合うことも多かった。さらに，大学の教員に相談しやすい環境にあったため，音楽の専門的な知見について助言をもらうことで，凝り固まった授業観を大きく揺さぶられた。そして何よりも，自分自身が学びながら教材研究，授業づくりを行うことで，その楽しさ，面白さを見いだすことができた。

本論文では，令和元年度から３年度までの附属小学校の３年間で自分の授業観がどのように変容していったかを授業実践を振り返りながら考察する。

附属小学校では，音楽部に所属した。１年目は音楽専科で４～６年生の音楽の授業をすべて担当した。２年目は学級担任として２年生を，３年目は４年生を受けもち，音楽の授業は自分の担当学級でのみ行った。本論文では各年の授業実践を２つずつ報告し，筆者の授業観の変容を振り返る。着任した令和元年度から，新しい研究主題「学校教育目標『体も心もたくましく，しかも，しなやかな子供』を目指して―本質に迫る授業を通して―」での研究が始まり，音楽部では，【視点１】音楽活動への意欲を喚起する教材との出合わせ，【視点２】曲想と音楽の構造との関わりに気付かせるための働き掛け，【視点３】協働して音楽活動を行う場の設定と音楽的なコミュニケーションを図るための工夫，という３つの視点を設定して研究を行った[1]。

３．授業の実際

（１）実践１　６年生「豊かな歌声をひびかせよう『おぼろ月夜』（歌唱）」（令和元年５月）

その年に新しく赴任した教員が行う授業研修会で実践した授業である。音楽専科として授業を担当した６年生の学級で実施し，授業のねらいを「曲のまとまりや強さの変化に気付き，どのように演奏するかについて思いや意図をもちながら，曲想にふさわしい歌い方を工夫することができる」と設定した。実践の概要を表１に示す。

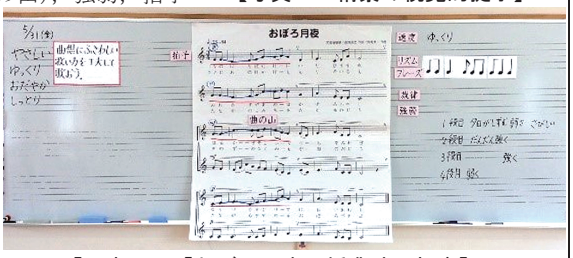
授業の初めの音取りでは，旋律の音を一度なぞっただけで歌えるようになる子供が多く，短時間で難なく歌えるようになった。しかし，観点を与え，楽譜から読み取れることを発表させた際，発問の意図がうまく伝わらず，ほとんど意見が出なかった。そのため，教師が誘導したり，考えを押し付けたりするような授業展開になってしまった。

この実践では，授業づくりの難しさに直面した。今から振り返ると，この曲を通して何を教えたいのかが自分自身の中ではっきりしていなかった。様々な書籍

表１　実践１の授業の実践概要

主な学習の流れ	指導者のかかわりや支援
１　範唱を聴いて，曲全体の感じをつかむ。	・曲を聴いた後に感じたことを発表すると予告した上で範唱を聴かせる。聴く観点を変えて，何度か聞かせることで，曲に慣れさせる。
曲想にふさわしい歌い方を工夫して歌おう	
２　歌詞を読み，情景を想像する。	・難しい言葉は説明しながら歌詞を音読させ，歌詞の内容を理解させるとともに，写真を見せて情景を視覚的にイメージできるようにする。
３　主な旋律を歌詞で歌う。	・範唱を聴きながら，フレーズごとに模唱させる。
４　楽譜を見て気付いたことを共有する。 ５　歌詞や楽譜から見つけたことを基に，曲に合った歌い方を工夫する。 ６　本時の学習を振り返り，音楽日記を書く。	・リズム，フレーズ，旋律（曲の山），強弱，拍子（弱起），音色などの観点を与え，楽譜から読み取れることを発表させる。発表したことを拡大譜で確認する。 ・４で気付いたことを基に，どのように歌えばよいかを考えさせ，全員で歌って確かめさせる。

【写真１　情景の視覚的提示】



【写真２　「おぼろ月夜」授業時の板書】

1　令和４年度がこの研究主題による研究の最終年度である。

からの受け売りで知識を羅列しただけであり，それでは授業にはならないと痛感した。当時の自分は「子供にとっての学び」よりも，見栄えが良い授業を目指していたと感じる。この後の附属小での実践の中で「よい授業」とは誰にとっての「よい授業なのか」を考えるようになった。

（2）実践２　６年生「全音音階を使って音楽をつくろう（音楽づくり）」（令和元年11月）

実践１での苦い経験を基に，本当に子供たちが生き生きと音楽活動に取り組む授業の在り方を模索する日々が始まった。「夏の音楽指導セミナー2019」に参加し，筑波大学附属小学校の高倉弘光先生の講座でトーンチャイムを使った音楽づくりを体験した。この時に音楽づくりの面白さを実感したので，トーンチャイムを使った音楽づくりを題材として実践を行うことにし，４／４時間目を秋の部内授業として校内で公開した。授業のねらいは，「全音音階の響きのよさや面白さを感じ取りながら，それらを生かして音楽をつくる」と設定した。題材の概要を表２に示す。

表２　実践２の題材の実践概要

次	時間	ねらい・学習活動
第一次	1	全音音階の仕組みを知り，トーンチャイムで即興的に表現する活動を通して，トーンチャイムの音色や響きと演奏の仕方との関わりに気付き，それらを通して音楽づくりの発想を得る。
	2	
第二次		即興的な表現を生かし，音を音楽へと構成することを通して，思いや意図をもちながらグループでまとまりのある音楽をつくる。つくった音楽を発表し，学習をまとめる。
	3	
	4	

題材の前半は，様々な条件を設定した中で即興的に表現し，後半は，即興的な表現で得た発想を生かし，グループでまとまりのある音楽をつくるという展開で授業を行った。第一次では，高倉（2012:126–134）を参考に，全音音階の音を使って，７種類の即興的な音楽遊びを行った。第二次では，第一次で実施した音楽遊びの表現をつなぎ,「始め方」「曲の山」「終わり方」を意識して，５～６人のグループでまとまりのある音楽をつくる活動を行った。その後，出来上がった音楽を聴き合い，感じたことや聴き取ったことを共有した。最後に，全音音階が使われている「鉄腕アトム」（高井達雄作曲）を聴き，作曲者が全音音階を使った意図を問うことで，全音音階がもつ雰囲気への理解を深めさせた。

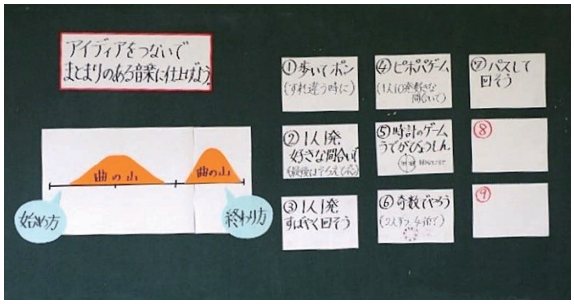


写真３　４時間目の板書

研究授業の本時（４／４）は「全音音階の響きのよさや面白さを感じ取りながら，即興的な表現で得た発想を生かして，まとまりのある音楽にするための思いや意図をもつことができる」というねらいで授業を行った。本時の学習過程を表３に示す。

音楽遊びでは即興的な表現に対する戸惑いやぎこちなさが見られたが，授業が展開するにつれて，音を出すことや音でコミュニケーションを取ることに集中し，音楽づくりにのめり込んでいく姿が見られた。普段の音楽の授業では，技能を高めるために黙々と練習に取り組んだり，鑑賞では静かに音楽を聴いて自分の感じたことを理路整然とまとめたりするなど，真面目な子供たちという印象であったが，本実践では，無邪気に様々な音の鳴らし方を試したり，トーンチャイムの音を介して友達と笑いながら関わったりする姿が見られた。また，音の工夫だけでなく，スキップしながら音を鳴らしたり，フォーメーションも変えながら音楽を作ったりするなど，音から感じることを体全体で表現する姿が見られた。

児童からは「やってみて面白いなと思った」「真ん中で座って聴いているのが楽しかった」「不思議な感じ。音の重なっているところが面白い」「音の響きを感じ取って遊ぶことができた」「ほわほわ～とする感じが楽しい」「自分の音も相手の音もしっかり聴けたのでよかった」「偶然できた曲が，１度しかできない曲になるので面白かった」などの感想があった。

この授業は，前実践での反省をもとに，「どういう

表３　実践２の本時（４／４）の学習過程

主な学習の流れ	指導者のかかわりや支援（※は評価の観点）
１　前時の学習を振り返り，本時の学習への見通しをもつ。	１　前時の学習での工夫や良さを価値付けながら振り返らせ，本時の学習への意欲を高めさせる。始まり方，終わり方，曲の山をどうするかについて考えながら音楽遊びのパーツをつなぎ，まとまりのある音楽にする。
アイディアをつないで，まとまりのある音楽に仕上げよう。	
２　曲の構成を考えながら音楽を仕上げる。 【視点３】 【視点２】	２【視点３】【協働して音楽活動を行う場の設定と音楽的なコミュニケーションを図るための工夫】 トーンチャイムを使った音楽づくり 一音ずつに分かれているトーンチャイムの特性を生かし，一人１音（または２音）を担当し，それらを重ねたりつないだりして音楽をつくる活動を設定することで，音楽的なコミュニケーションを図りながら協働して音楽活動を行う必然性をもたせる。 【視点２】【曲想と音楽の構造との関わりに気付かせるための教師の働き掛け】 思いや意図と表現の工夫の関わりを自覚させたり，気付かせたりするための発問
３　つくった音楽を聴き合い，感じたことや聴き取ったことを共有する。【視点２】	２では各グループを回りながら，「どうしてそうしたの」と発問することで，「○○な感じにしたかったので，□□（リズム，音の高さ，音の出し方等）にしました。」という思いや意図を引き出し，思いや意図（感じたこと）と表現の工夫（聴き取ったこと）との関わりの自覚化を図ると共に，感じたことと聴き取ったこととを往還させながら，試行錯誤できるようにする。 ３では，感じたことや聴き取ったことを結び付けて考えられるように発問したり，価値付けたりする。 ※全音音階の響きのよさや面白さを感じ取りながら，即興的な表現で得た発想を生かしてまとまりのある音楽にするための思いや意図をもつことができたか（思・判・表：発言，演奏聴取）
４　全音音階が使われている音楽を鑑賞する。	４　『鉄腕アトム』の冒頭部分を聴かせ，全音音階が聞こえたら挙手させる。作曲者が全音音階を使った意図を問うことで，全音音階がもつ雰囲気への理解を深めさせる。
５　本時の学習のまとめをする。	５　与えられた条件を超えて様々な発想を基に音楽づくりができたことを価値付けるとともに，生活の中にも全音音階が使われていることを伝え意欲付けを図る。

授業が正解なのか」を求めるのではなく，自分なりの音楽の授業をつくっていくことを模索し始めた実践となった。授業を通して考えたことを４点挙げる。

１点目は「聴くこと」との関わりである。トーンチャイムは，各自が１～２音を担当して音楽をつくるので，必然的に音をよく聴く必要がある。子供たちは，自分の音を出しながら友達の出す音をよく聴き，それに合わせて次の自分の音を出すという「音によるコミュニケーション」を行っていた。学校教育における音楽の授業では，協働で音楽をつくる面白さを感じ取ることや，自分と相手の音をよく聴くということが大事な要素であると感じた。

２点目は，表現の２つの側面である。音楽には，発表会など人前で聴衆に向けて表現する意味合いが強い演奏と，仲間内で自分たちが楽しむための演奏があると考える。附属小の子供たちが経験してきた表現は，前者に重きが置かれていた。技術を磨き，聴衆に向けて上手に表現することは大きな喜びであるが，音楽の授業内においては，純粋に自分たちが楽しむために表現することも子供にとって大事な経験だと考えた。教師の指示なしに自然と輪になって表現するグループが多く見られたのは，自分たちのために表現する楽しみ

写真４　跳びはねながら表現している様子

写真５　グループで音楽づくりをする様子

を見いだし，夢中になっていったからであろう。他のグループの発表に耳を傾けそのグループの表現のよさを認める発言をすることができたのも，自分たちの表現を楽しむことを知ったからだと考える。

３点目は，「混沌とした時間」の意味についてである。本実践では，敢えてワークシートなどを用いずに，即興的な表現を大切にして音楽づくりを行った。『学習指導要領解説』で音楽づくりに関して「主に即興的に表現する活動を通して育成する資質・能力」と「主に音を音楽へと構成する活動を通して育成する資質・能力」の２つが示されている（文部科学省2018：100－106）ことからも分かるように，即興的な表現は音楽づくりにおいて必要な段階である。しかし即興的に試行錯誤をしている時間は，「混沌とした時間」でもある。試している段階なので，作品づくりに採用できそうなアイディアもあれば思った通りに表現できないアイディアもある。うまくいってもいかなくても，「試してみる」こと自体に価値があり，そこに学びがあると感じた。まとまりのある音楽に一直線に向かっていくような授業は整然とした印象を与えるが，学びの機会を教師が奪っていると考えることもできる。ただし，混沌とした時間は，子供たちにも，それを見守る教師にも「このやり方で本当に形になるのか」という不安が生まれる。教師が主導権を握って不安感が生まれないようにコントロールする方法もあるが，子供たちに音楽づくりの活動を委ねた場合には，混沌とした時間を受け止め，子供を信じて余計な口出しをせずに見守る覚悟が必要である。音楽づくりにおいては，「混沌とした時間」があるからこそ面白い音楽が生まれることを本実践から学んだ。教師は「混沌とした時間」を子供とともに楽しむことが大事である。

４点目は，授業における学びについてである。授業後に，参観していた同僚から「子供たちは音ではなく，動きを面白がっていただけではないのか」「子供たちは意欲的に取り組んでいたが，どんな学びがあったのか」という疑問が投げ掛けられた。表現に関わる授業において「学び」をどう捉えるかについて，自分なりの考えをもつ必要があると感じた。

（３）実践３　２年生　コロナ休校中における授業動画づくり（令和２年４～５月）

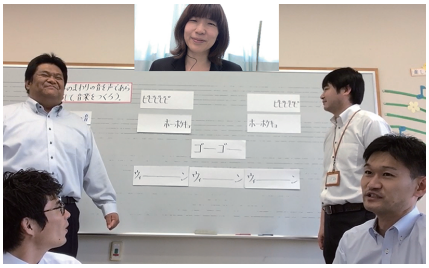
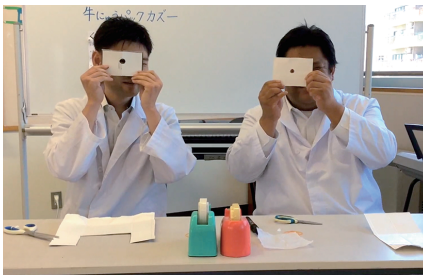
令和元年３月から始まった新型コロナウイルス感染症拡大による臨時休校期間中に，附属小学校では，授業動画配信による遠隔授業を実施した。その一環として２年生４クラスを対象に，11本の音楽の授業動画を制作した。子供たちが自宅で，自力で（保護者の協力を得て）取り組めるように教科書の題材を中心に構成した。音楽的な学びがあることに加えて，非常事態だからこそ音楽の力で楽しく元気になれるよう心掛けた。学年担当の先生方にも出演してもらい，先生方が楽しみながら歌ったり身体を動かしたりしている様子を伝えた。授業のねらいは「動画に合わせて一緒に楽しく歌ったり演奏したり，身近な物を生かして生活の中の音や音楽に親しんだりし，音楽を楽しむことができる」と設定し，１本当たり５～６分の動画を，前半・後半に分けて提示した。実践の概要を表４に示す。

子供達には動画視聴後にGoogleフォームで授業の感想を提出してもらった。「音楽に合わせて体を動かすのが楽しかった」「みんなですることができるのでまたやりたい」「家族で『なべなべそこぬけ』や『ずいずいずっころばし』などができた」「先生がかくれんぼの歌の時にどのように言葉を返すといいのかコツを教えてくれたことが勉強になった。」「お風呂のお湯を溜めるときのジャーという音や，ストーブのガタンガタンの音で歌った」「先生たちが『あんたがたどこさ』に合わせて動いているところが面白かった」「わらべ歌を知れて楽しかった」「先生たちの歌が楽しそうだった」などの感想があった。

この実践では，登校できずに家で過ごす子供たちにとって必要な授業を考えた。「教科書に載っているから」「年間指導計画の順番で」という考え方ではなく，実態をもとに題材をつくったり，既成の題材をつないだりする力が高まった。また休校期間中は比較的時間の余裕があったので，教材研究を深めたり他の先生方と協働して授業づくりを行ったりすることができ，その面白さに目覚めた。身近なもので音楽をつくるという視点から，手作り楽器の可能性にも興味をもった。授業動画で紹介した手作り楽器以外にも，教材研究の一環として，印刷機のマスターが巻いてある紙芯を使いフィリピンの楽器トガトン（竹筒）を模して同僚の先生方と演奏してみるなど，新たな分野への興味が湧いた。

上に示した感想からは，子供が音楽の楽しさを感じ取っていたことが分かる。その理由の一つに教師自身が音楽を楽しんでいる姿を見せたことがあったと考える。

表４　実践３の実践の概要

題材名	授業動画の概要
「日本のうたでつながろう」	①教師と一緒に『ずいずいずっころばし』『あんたがたどこさ』を歌ったり，手遊びをしたりする。 ②『あんたがたどこさ』の「さ」の場面で，教師が色々な動きをする動画に合わせて一緒に身体を動かしたり，オリジナルの動きを考えたりする。（ジャンプ，まりつき，手拍子等） ③リズムや言葉の模倣→応答をする。教師と一緒に『なべなべそこぬけ』を歌う。曲に合わせてペアで手をつないで身体を動かす。「『かくれんぼ』に合わせて「もういいかい」に「まあだだよ」「もういいよ」と答える。どのような歌い方で答えたらよいかを考えながら表現する。 **【写真６『あんたがたどこさ』の様々な動きの例示】**
「せいかつの中にある音を楽しもう」	④３文字の食べ物の名前でリズム遊びをする。『かくれんぼ』の歌を復習する。学校周辺で教師が撮影した動画を見ながら，身の回りの様々な音を聴く。（時計の秒針，草刈り機の音，鳥のさえずり，風の音など）  **【写真８　声を重ねて表現する教師の様子】** ⑤聞こえた音を確認し，それを声で表現する。声での表現をつなげて表現する。身の回りの様々な音を探しておくように周知する。 **【写真７　歌に合わせて教師がかくれんぼをする様子】** ⑥手作りカズーを紹介し，材料を伝える。前回見付けた身の回りの音を声で表し，重ね方や強弱等を工夫しながら表現したり，自分が見付けた音を教師の動画に合わせて表現したりする。
「いろいろな楽器の音をさがそう」	⑦『子犬のビンゴ』で歌遊びをする。ハンドベルやウッドブロックなどの音楽室にある楽器を鳴らして紹介する。 ⑧空き缶，ペットボトル等の身近な物を鳴らして紹介する。自分の家の物で教師のリズムを模倣して鳴らす。教師が身体の前で，時計の針のように手を一周回す間に好きなタイミングで５回音を鳴らす。附属中学校の音楽教師と共同で作成した「草笛を吹いてみよう（附属校園の校庭で撮影）」の動画を視聴する。 **【写真９　校庭の草で草笛を作る動画】**
「がっきをつくろう」	 **【写真 10　牛乳パックカズーを作る動画】** ⑨（音楽と関連させ「図工」の授業として動画を制作）牛乳パック，ペットボトル，輪ゴム，ビニール袋を使って「牛乳パックカズー」を作ったり，家にあるもので作れる手作り楽器を紹介したりし，作れそうな人は作ってみるように促す。 **【写真 11　副校長先生や教頭先生も一緒に『ミッキーマウスマーチ』を合奏している動画】** ⑩手拍子をしながら『ロンドン橋落ちた』を歌う。テンポを変えてスキップをしながら歌う。『ミッキーマウスマーチ』も同様に曲に合わせて踊る。 ⑪⑨の動画で作った牛乳パックカズーを使って『ミッキーマウスマーチ』を演奏する。教師が手作り楽器を使って合奏する動画に合わせ，カズーを使って演奏する。

音楽は一人で楽しむこともできるが，友達と一緒に協働で音楽活動を行う楽しさもある。動画を制作する中で，協働する音楽活動の楽しさや意味を自分自身も実感した。一方で，動画を撮影している時点では，子供たちに対して教師側からは一方的な働き掛けしか行うことのできない難しさもあった。普段いかに自分が子供の反応を見ながら声掛けを行ったり，授業の流れを微調整したりしていたのかが分かった。授業は教師と子供たち双方の働き掛けとその反応で作られていくものであることを確認した実践であった。

（4）実践４　２年生「ようすをおもいうかべよう『あのね，のねずみは』（歌唱）」（令和２年９月）

附属小では令和２年度から，横断的・総合的な展開による資質･能力が発揮される姿の検証のために，「言語力」「問題解決力」「活用力」「表現力」「調整力」という５つの資質・能力チームで研究を行うこととなった。実践４は，音楽科，図画工作科，体育科が「表現力チーム」として行った授業実践の一つで，９月に校内研究授業として行った。

チーム編成後に，メンバーで「表現力」をどう捉えて研究を進めるかを話し合い，「自分の思いや考えをよりよく表す力」を表現力と捉えることにした。「表現」というとアウトプットする場面に着目しがちだが，「表現に向かうきっかけ」「試行錯誤」「形として整えていく」などアウトプットに至るまでの場面も含めて表現と考えた。それぞれの場面に対して子供がしっかりと取り組むことは，自分の思いや考えを他者に向けた表現としてよりよいものにすることにつながると考えて実践を行った。表現力を育成し発揮させるために特に工夫したのは，意欲をもたせて表現に向かうきっかけとなる導入と，目的に沿った試行錯誤ができる環境作りの２点であった。「歌詞や音楽が表す様子を想像し，曲に合った歌い方や演奏の仕方を工夫したり，音楽の表す様子の変化を感じ取って聴いたりすることができる」というねらいを設定し，歌詞や音楽に表された情景や動物の様子，気持ちに合った声の音色や強弱，速度などを考えながら試す中で，「このように歌いたい，演奏したい」という思いに合った表し方を見いだす力を育成したいと考えた。題材の概要を表５に示す。

表５　実践４の題材の概要

次	時間	教材名	主な学習活動
第一次	1	『あのね，のねずみは』（歌唱）	歌詞の表す感じや旋律のリズムの特徴を感じ取り，声の音色やリズムの特徴を生かした歌い方を工夫して歌う。
第二次	2	『たまごのからをつけたひなどりのバレエ』（鑑賞）	ひな鳥の踊りを思い浮かべ，体を動かしながら曲を聴き，音楽の楽しさを見いだしながら，曲全体を味わって聴く。
	3		曲想を感じ取ったり，音色，旋律の反復や変化を聴き取ったりし，それらを関わらせながら聴く。
第三次	4	『夕やけこやけ』（歌唱）	１番と２番で変化する夕焼けの情景を想像し，その様子が伝わるような歌い方を，声の音色や旋律，速度，強弱を基に考え，様々な表現の仕方を試しながら工夫して歌う。
第四次	5	『小ぎつね』（歌唱・器楽）	１～３番の小ぎつねの気持ちを想像し，その気持ちが伝わるような歌い方を，声の音色，旋律の反復，強弱などを基に考え，表現の仕方を考えて歌う。
	6		旋律を階名で歌ったり，音色に気を付けながら鍵盤ハーモニカで演奏したりする。
	7		歌唱表現での工夫を生かし，音色，旋律の反復，強弱などの変化による違いを感じ取りながら，どのように表現するかを考え，表現を工夫して鍵盤ハーモニカで演奏する。

本時のねらいを「歌詞の表す様子や旋律のリズムの特徴に合った声の音色や表現の仕方を工夫し，どのように歌うかについて思いをもつことができる」と設定して研究授業を行った。本時（１／７）の学習過程は表６の通りである。

授業冒頭で，教師が範唱して例示した「優しい感じ」「可愛い感じ」などの歌い方を試す姿が見られた。その後，曲を３つの部分に分け，１番から３番まで全部で９つの中から，自分が表現の工夫をしたい歌詞を各自が選んでグループ活動を行った。グループでの表現活動では個人差，グループ差が大きかった。自分の工夫を他の友だちに積極的に伝える子や，自分で何度も歌い方を試行錯誤する子，歌詞の「ブーン」という部分でハチが跳ぶ身振りを各自が工夫しながら歌うグループがあった一方で，どんな歌い方をすれば歌詞の様子を表すことができるか見通しがもてず，ただ繰り

表６　実践４の本時（１／７）の学習過程

主な学習の流れ	指導者のかかわりや支援（※は評価の観点）
１　範唱を聴き，『あのね，のねずみは』を歌う。	１「先生のお友達の動物を紹介するね。」と前置きして範唱する。動きを付けながら歌うことで動物を紹介している様子であることをつかませる。出てきた動物の性格などを問いながら範唱することで，歌詞に着目させ，歌詞の内容を捉えさせる。歌いにくい付点のリズムや見逃しやすい休符を取り上げ，繰り返し歌わせることで，正しく歌うことができるようにする。
どうぶつのことがもっとつたわるようにうたおう。	
２　本時の学習課題をつかむ。	２「動物のことがもっと伝わるようにするにはどう歌ったらよいかな。」と投げ掛けることで，歌詞やリズムの特徴に合わせて歌い方を工夫したいという思いをもたせる。１番を例にして，同じ歌詞でいくつかの歌い方を試させ，色々な歌い方が考えられること，歌い方によって感じが変わることを全体で確認する。
３　歌詞や曲の感じに合った歌い方を考え，試す。	３　動物のことがより伝わる表現にするために，「声の音色やリズムの特徴を生かした歌い方を工夫する」と活動を焦点化した上でいろいろな歌い方を試させる。自分なりに思いをもって表現できるようにするために，１～３番の中のどこを工夫したいかを選ばせる。同じ箇所を選んだ友達と考えを交流したり，伴奏に合わせて歌って確かめたりする場面を設定する。歌い方を統一させるのではなく，いろいろな思いや歌い方の交流を目的として活動させる。１～３番の中で，自分が考えた箇所をリレーでつないで歌わせ，聴き合う場面をつくることで，互いの思いや表現のよさを認め合ったり，表現への思いを膨らませたりさせる。 ※歌詞の表す様子や旋律のリズムの特徴に合った声の音色や表現の仕方を工夫し，どのように歌うかについて思いをもつことができたか。（思・判・表：演奏聴取，発言内容）
４　本時の学習を振り返る。	４　歌い方を工夫することで動物の様子をより伝えることができたかを振り返らせることで，声の音色やリズムを生かした歌い方を工夫することでより様子を表すことができるという学びを価値付ける。

返し歌うだけのグループもあった。「表現に向かうきっかけ」として，既存のグループに担当箇所を割り当てるのではなく，児童一人ずつが自分で担当箇所を選ぶ形としたが，友達と同じという理由だけで担当箇所を選んだ子供も見られた。またグループごとの人数が大きく異なる結果となった。一人で表現の工夫をすることになった児童もいれば，グループのメンバーが多く主体的に関わらない児童もいた。

本実践では，授業の流れや手立てについても多くを考えたが，それ以上に「音楽の授業の在り方」について多くの問いが生まれた。音楽づくりの授業と比べたとき，歌唱や器楽の授業には，教師がたどり着かせたいある程度の「正解」があると感じていたため，正解をどう教え学ばせるかを悩んだ実践であった。実践は歌唱だったので，歌詞の表現を考えたり，楽譜に記された指示を読み取ったり，音楽構造を理解することで，児童は曲想を感じ取り，曲想に応じた表現を工夫することが学習指導要領で定められている。教師としては，「ここの部分をこう工夫させたい」という指導事項（正解）を押さえた上で授業を行う。子供たち自身が自分なりの表現を工夫するためには，長期的な音楽経験と授業での学びの積み重ねが必要不可欠である。１回の授業の完成度を求めて，教師は，想定した指導事項から大きく外れたときには「正解」に近付けようと「答え」を教え込んでしまいがちである。そうすると，それは児童の表現ではなくなってしまう。今回の授業では，教師による例示は行ったが，それ以外の方法で子供たちに気付かせる手立てを設定して教師が導くというステップを飛ばして，「自分たちで考えましょう」と児童に丸投げしてしまった部分があった。

写真12　グループで歌い方の工夫を考える

写真13　ハチの跳ぶ様子を身振りで表しながら歌うことを試す

校内授業を第１時としたのは，曲への出合わせ方を

工夫し，初めて曲に出合ったときの新鮮な気持ち，意欲を表現につなげさせたいと考えたからであった。範唱を聴き歌詞を読むことで曲想をつかみ表現を深められると考えたが，実践を終えて，「こうしたい」という児童の「思い」は曲をある程度理解する中で生まれてくるのかもしれないと感じた。児童が試行錯誤をするためには，まずは，自分達が表現したものからよさや改善点を見出す必要がある。その上でさらにどう表現するか工夫を考える場を設定することが大事である。つまり，表現することは聴くことと一体となって成立するのであり，低学年のうちから聴くことを意識して指導していくことが大事であると感じた。

校内授業の参観者からは，たった一人でもみんなの前で堂々と歌える子供の姿に対して，「そういった姿こそ，表現力のある本校で目指したいたくましい姿といえるのではないか」という指摘があった。しかし，一人で堂々と歌えることを「唯一の正解」にしてしまうと，一人一人の表現を尊重することが難しくなり，画一的な「正解」を求める指導になってしまう危険性があると感じる。音楽の授業では，多様なしかも自分なりの表現が認められ，尊重される時間になればよいと強く感じた。

本実践は，「見栄えのよい授業」を目指して迷走した感じがあり，子供たちにとっての「よい」授業とは言えなかった。附属小学校に来たばかりの頃の「授業としての正解を探す」というよくない側面が前面に出てしまった。しかしこのチーム研究を通して，チーム内の先生方と授業や子供についてのたくさんの対話を重ねることができた。授業についてとことん対話ができることは附属小学校で働くことの醍醐味の一つであると感じた。

（5）実践５　４年生「トーンチャイムのひびきを味わいながら音楽をつくろう（音楽づくり）」（令和３年11月）

秋の部内授業として５／６時間目を校内で公開した実践５の授業は，実践１「全音音階を使って音楽をつくろう（音楽づくり）」の内容を一部組み替える形で行った。前回の実践では生き生きと音楽活動に取り組む６年生の姿が見られたが，トーンチャイムによる音楽づくりは学年を問わず有効な題材なのか，有効だとすれば何が生き生きとした子供の姿を引き出しているのかを考えるためにこの題材を設定した。前回の実践では「全音音階」を軸としたが，今回はトーンチャイムの響きを味わいながら音楽づくりを行うことに重点を置いた。また中間発表の場を設定し，他のグループに聴かせたり，他のグループの演奏を聴いたりする機会を設けることで，中間発表が児童の音楽づくりの工夫にどのような影響を与えるのかを観察することとした。題材のねらいは，「トーンチャイムの音色や様々な響きを聴き取り，それらのよさや面白さを感じ取って生かしながら，まとまりのある音楽をつくる」と設定した。実践の概要を表７に示す。

研究授業の本時は「トーンチャイムの音色や響きのよさを感じ取り，音やフレーズのつなげ方や重ね方を工夫し，どのように全体のまとまりを意識した音楽をつくるかについて思いや意図をもつことができる」ことをねらいとして授業を行った。本時の学習過程を表８に示す。

６年生での実践と同じように，４年生でもトーンチャイムを持って跳びはねながら音を鳴らす等の動きが見られ，トーンチャイムが子供たちの音に対する感受性を刺激し，身体的な反応を引き出すことが確認できた。前回の実践とは異なり，活動がうまく成立しないグループがあった。その理由は，グループ活動の経験不足，音楽的な学びや音楽的活動の経験不足に加え，活動中に全音音階の制限を一部緩和したため既成曲のメロディを素材に使って音楽を構成する案をめぐり対立したグループなど，様々であった。しかし，多くのグループでは，互いの表現を聴いたり感じ取ったりしながら音を出して音楽をつくる姿が見られた。音を聴き合うだけでなく，自然と輪になって互いを見合いながら表現する姿も見られた。

教室で発表する場面になると，聴き手に身体を向けるためにそれまでの輪の形が崩れたグループや，聴き手を意識して上手に演奏して見せることが主目的となってしまったグループもあった。また，毎時間の振り返りのために学習カードを用いたが，そのカードの裏面に音楽の構成をメモする子供もいた。メモすること自体が悪いわけではないが，音を出して試してみる前に，頭で考える音楽づくりが行われてしまったことも，活動に集中できない子供を生み出すことにつながったのではないかと考えた。

この実践からトーンチャイムという楽器のもつ力は

表７　実践５の題材の概要

次	時間	◎ねらい　○学習内容
第一次	◎トーンチャイムで即興的に表現する活動を通して，トーンチャイムの音色や響きと演奏の仕方との関わりに気付き，音楽づくりの発想を得る。	
	１ ２	○トーンチャイムの音色や演奏の仕方による響きの特徴に気付く。 ○音楽遊びに取り組みながら様々な表現を試し，音楽づくりの発想を得る。 **【写真 14　人とすれ違ったときに音を鳴らす音楽遊び】**
第二次	◎音楽ゲームでの表現を生かし，音を音楽へと構成することを通して，思いや意図をもちながらグループでまとまりのある音楽をつくる。	
	３ ４	○前時に試した表現を生かし，全体のまとまりを考えながらグループで音楽をつくる。 音楽づくりの条件　①音楽遊びの表現を３～４つ組み合わせる。②「始め・中・終わり」でつくる。③使う音は（全音音階の）印がついた音から自由に選んでよい。
	５	○つくった音楽を聴き合うことで表現を見直し，更に思いや意図を膨らませながらまとまりのある音楽を仕上げる。
	６	○つくった音楽を発表し，互いのよさや学んだことを伝え合って学習をまとめる。

表８　実践５の本時（５／６）の学習過程

主な学習の流れ	指導者のかかわりや支援（※は評価の観点）
１　音楽を聴き合い，互いの表現のよさや更に工夫できるところを伝え合う。 【視点２・３】 思いや意図の自覚化や明確化を促すための聴き合いの設定	１　音楽がある程度形になってきたところで，互いの音楽を聴き合わせる。五つのグループの内の一つのグループがつくった音楽を全体で聴き，そのよさや更に工夫できるところを共有した後，２グループずつ互いに聴き合わせる。そうすることで，他のグループの表現のよさに気付かせるとともに，友達の意見を聞くことを通して，自分たちのグループの表現のよさや改善したい点を見付けるきっかけとする。それを基に思いや意図を明確にし，表現を高めていく意欲をもたせる。
自分たちの表現を見直し，まとまりのある音楽に仕上げよう。	
２　自分たちの表現を見直し，まとまりのある音楽に仕上げる。 【視点３】 トーンチャイムを使った音楽づくり	２　聴き合いを通して気付いたことや考えたことを基に，自分たちの表現を見直しさせながら，まとまりのある音楽に仕上げていくことを確認する。一人１音（または２音）を担当し，数人で音を分担するというトーンチャイムの特性を生かし，協働して音楽づくりを行う必然性のある場と活動を設定することで，一人一人が自分の音を出しながらも，他の奏者が出す音をよく聴くという，音でのコミュニケーションの充実を図りながら，音楽表現を高めさせる。
３　音楽をつくりながら考えたことを振り返り，伝え合う。	３　音楽をつくりながら考えたことや試したことについて振り返らせ，ワークシートに記入させる。書いたことを伝え合わせることで，音楽をつくりながら新たに生まれた思いや意図と表現の工夫を明確にさせるとともに，互いの考えを認め合わせる。 ※トーンチャイムの音色や響きのよさを感じ取り，音やフレーズのつなげ方や重ね方を工夫し，どのように全体のまとまりを意識した音楽をつくるかについて思いや意図をもつことができたか。 （思・判・表：発言，演奏聴取・記述）
４　本時の学習をまとめ，次時の学習について知る。	４　様々な思いや意図をもちながら，よりよい音楽にしようと工夫していたことを価値付け，次時の発表へ向けての意欲付けを図る。

大きいこと，ただし楽器を与えれば音楽的な活動が促進されるというわけではないことが明らかになった。教師が児童の実態を把握し，実態に合った題材構成をすることの大切さを改めて学んだ。４年生と６年生では発達段階も異なるが，何よりも音楽的な経験やグループ活動の経験の差が大きかった。今回グループにより活動の進み具合に差が出たが，そこには音楽経験以外の要素も大きく関係していた。個人的な音楽的経験があるが故に他者と考えをすり合わせることができない子供もいれば，音楽的な経験はそれほど多くな

いが他者の考えをうまく引き出して「やってみよう」と周りにうまく働き掛ける子供もいた。音楽づくりは，音楽活動を通して他者から学ぶ場であると同時に，他者との関わり方を学ぶ場でもあると考えた。

写真15　グループで音楽づくりをする様子

（6）実践6　４年生「竹筒のひびきを味わいながら（音楽づくり）」（令和４年１月）

公開研究会で行った実践である。当初は対面での公開予定であったが，新型コロナウイルスの感染拡大により，動画による授業公開となった。これまでの実践からの学びや課題を反映させるとともに，世界には様々な音楽があり，それぞれによさがあることを知ってほしいと考え，フィリピンの楽器であるトガトンを参考にして，竹筒を使った音楽づくりの実践を行った。これは実践３の動画制作の時期に紙筒を使って試した教材の発展である。「竹で作られた様々な楽器の音楽から竹の響きのよさを感じ取り，竹筒の響きのよさやリズムの組み合わせ，重なりの面白さを味わいながら楽しんで音楽づくりに取り組むこと」を題材のねらいとして設定した。実践の概要を表９に示す。

表９　実践６の題材の実践概要

次	時間	◎ねらい　○学習内容
第一次	◎竹で作られた楽器の音楽を聴き，竹の音色や響きの特徴，それぞれの音楽の特徴について，それらが生み出すよさや面白さに気付く。	
	1	○バリンビン，アンクルン，クロンプット，尺八，こきりこ，鹿威し，トガトン等の竹楽器の音色や響き，それぞれの音楽の特徴を考えながら音楽を聴く。
第二次	◎竹筒の響きやリズムの組み合わせ，重なりを聴き取り，それらの働きが生み出すよさや面白さを感じ取りながら即興的に表現することを通して，音楽づくりの発想を得て音楽をつくる。	
	2	○竹筒で音を鳴らして遊んだり，リズムを重ねる即興的な表現を試したりしながら，そのよさや面白さを感じ取る。
	3	○６人グループで，４拍のリズムを順番に重ねながら即興的に表現し，音楽づくりの発想を得る。
	4	○前時に得た発想を基に，竹筒の音楽に合った終わり方を考え，グループの音楽をつくり上げる。
	5	○つくった音楽を聴き合い，そのよさや面白さを共有すると共に，トガトンの音楽を鑑賞し，音楽の仕組みについて気付く。

本時のねらいは，「竹筒の響きやリズムの組み合わせ，重なりを聴き取り，それらの働きが生み出すよさや面白さを感じ取りながら，即興的に表現することを通して，音楽づくりの発想を得ることができる」と設定した。本時（3／5）の学習過程を表10に示す。

最初の授業で様々な竹楽器を紹介した時から竹の音色に興味を示す姿が見られた。コロナ禍で音楽活動に制限があったため，箏での音楽づくり（７月），トーンチャイムでの音楽づくり（実践５）に続く３回目の音楽づくりである。児童はグループでの音楽づくりに慣れてきて，友達との意見の交流のやり方も上手にできるようになった。

授業ではこれまでの音楽づくりの授業で学んだ方法を参考に，前の人と音をずらしたり，相手が出す音と音の間に自分が音を出したりして音楽をつくっていった。音をずらすためには，前の人の音をよく聴く必要がある。演奏中は言葉ではなく，音楽でコミュニケーションを取る姿が見られ，相手との関係の中で自分の表現を生かす営みが生まれていた。時折ぴったりと音が揃ったときに歓声が上がったり笑い声が起こったりするのは，音でのコミュニケーションが成立している証拠である。音楽は関係性の中で紡がれていくものであることを実感した実践であった。

教師が定めた本時のねらいは，試行錯誤の中で音楽づくりの発想を得ることであった。音楽を完成させるところまでは求めていなかったが，子供たちは自分たちで終わり方まで考えて表現しているグループが多く，実践の積み重ねの成果を感じた。子供たちは，やり方

表10　実践６の本時（３／５）の学習過程

主な学習の流れ	指導上の配慮事項（※は評価の観点）
１　本時の学習のめあてを確認し，見通しをもつ。	１　４拍のリズムを順番に重ね，６人で即興的にリズムアンサンブルをすることを伝える。初めに，教師が提示したリズムを聴いて，自分で考えたリズムを重ねて即興的に表現をする演示を行うことで，その後のグループ活動に見通しをもたせる。また「何を考えてリズムを決めたのか」と発問し，自分の前に演奏した人のリズムや音色，拍との関係で自分のリズムを決めていることに気付かせ，グループ活動で工夫する音楽的な要素を焦点化する。
リズムや竹筒の音の高さの組み合わせ方を試しながら音を重ねて表現しよう。	
２　リズムや竹筒の音高の組み合わせ方を変えながらグループで即興的に表現する。 グループで協働し，互いの音を聴き合いながら音を重ねて表現する音楽づくり【視点３】	２　１グループに音高の異なる６本の竹筒を与え，５～６人のグループで即興的に表現させる。その際，自分の前に演奏した人が表現したリズムを聴いて自分の表現するリズムを工夫できるように，各グループを回りながら，個別に助言していく。前の人の表現するリズムとの関係性を考えながら自分のリズムを考える活動を設定することで，自然と音楽的なコミュニケーションを図りながら協働して音楽活動を行うことができるようにしていく。リズムや音高の関係性を考えながら表現するのが難しい子供には，拍を刻むリズムを打たせるなど，友達と拍を共有しながら音楽的なコミュニケーションを図ることができるようにする。
３　いくつかのグループの表現を聴き，そのよさや面白さについて共有する。 リズムや竹筒の音高など，音楽的要素の工夫の共有と価値付け【視点２】	３　発表側，聴く側のそれぞれのグループの表現に生かしていけるように，発表後に表現のよさや面白さについて感じたことを共有させる。また，音楽をつくっている過程や，表現された音楽から，リズムの選び方や重ね方，竹筒の音色の生かし方などの音楽的な要素の工夫についての価値付けを行う。 ※　竹筒の響きやリズムの組み合わせ，重なりを聴き取り，それらの働きが生み出すよさや面白さを感じ取りながら，即興的に表現することを通して，音楽づくりの発想を得ることができたか。（思・判・表：演奏聴取，発言）
４　本時の学習を振り返り，次時の学習への見通しをもたせる。	４　「どうやって音楽を終わらせるか」と発問した上で，トガトンの動画の終わりの部分を視聴させる。西洋音楽の終わり方とは異なりずっと続いていることに気付かせた上で，「自分だったらどう終わらせるかを考えてみよう」と伝えて次時の学習に期待感をもたせる。

が分かり，面白さを見いだせば，後は自分たちでどんどん夢中になって音楽にのめり込んでいく。「だんだん速くしよう」「何回繰り返す」「どの順番にする」「やってみようよ」など，これまでの音楽づくりで学んだことを使って活動を行っていた。終わり方についても，「一人ずつ抜ける」「みんなでそろえて一回鳴らす」「だんだん小さくしていく」など，見通しをもちながら様々な方法を試す姿が見られた。さらに，実際に音を出して試してみた後に，「どうだった」「もっとこうしたら」と試行錯誤を自発的に繰り返していた。

教師としての関わり方にも工夫を行った。これまでの音楽づくりの授業では，グループ活動中はグループを回って「どうしてそうしたの」と発問していたが，本実践では「できたところまででいいから聴かせて」と子供たちがやろうとしている表現に興味をもち，子供の表現する音楽の世界に教師が入り込み，何を表現しようとしているのかその意図を，敬意をもってくみ取ることに徹した。そうすることで，純粋に子供の発想に驚かされ，ともに感動することができた。教師が子供の発想を面白がると，子供たちは自分たちの表

写真16　グループでの音楽づくり

写真17　グループでの音楽づくり

現に自信をもち，子供の側から「先生，聴いてください」と声を掛けてくるようになった。うまくできたと感じると誰かに聴いてもらいたい気持ちが出てくるようである。活動がスムーズに進んでいるグループの対話を聴いていると，友達の考えに興味をもち，「そのアイディアもいいね。試してみよう」「今のとさっきのをつなげてみたらいいんじゃない」「今の面白かった。もう一回やってみよう」などど面白がって受け入れようとする前向きな言葉が聞かれた。柔軟性があるからこそ物事の見方が変わり，発想が広がっていくのだということを子供の姿から学ぶことができた。

題材の最後に，フィリピンのカリンガ族の演奏するトガトン（『世界民族音楽大系』所収）を鑑賞した。６人の奏者が１人ずつ異なるリズムを演奏していたので，鑑賞後に学級を６つのグループに分けて同じリズムで合奏を試みた。単純なリズムを繰り返すだけなのだが，５分以上も合奏は続き，教師が声を掛けて演奏を止めるまでずっとリズムを刻み続けた。教材研究の際に，同僚や大学の先生方と何度もこの竹筒の演奏を行ったが，ずっと続けたくなる，人を夢中にさせる独特の音色がある。これは体験してみないと分からない音楽の力である。日頃子供たちが接している音楽は，上手に演奏できるか否かを気にしがちだが，それとは別次元の音楽である。竹を切って，節を抜いただけのシンプルな楽器の音色と，楽器から生みだされるリズム音楽の面白さは，音楽科の授業の展開に今後も生かせる大きな可能性を感じた。まずは教師自身が様々な音楽に耳を開き，その音楽を楽しみ尽くすことが教材研究の第一歩であり，授業づくりでは重要なポイントになると感じた。

写真18　体験した後だからこその真剣な鑑賞

写真19　カリンガ族のリズムで合奏する

４．考察：３年間をふりかえって

最後に，附属小学校での３年間の実践を通して学んだこと，考えたことについて述べる。

３年間の実践で特に力を入れて取り組んだのが音楽づくりの活動である。実践を通して感じたのは，音楽づくりの学習がもつ可能性である。音楽づくりの活動を通して，お互いの音を注意深く聴く姿勢が生まれ，友達と協働しながら音楽をつくり上げる中で，自分を表現する力も育まれていくからである。逆説的ではあるが，表現するために必要なのは「聴く力」であると感じた。歌唱や器楽，鑑賞の学習でも同様のことは言えるが，特に音楽づくりの力は大きい。協働する必然性のある題材を教師が構成し，魅力的な教材と出合わせることで，子供たちは教師が想像する以上の創造力を発揮する。これは音楽のみならず，これから社会を生きていく上でも求められる大切な力である。これらを育むことは音楽づくりの主目的ではないが，楽しみながら音楽づくりに取り組んだ結果として，このような力も育むことができると感じる。

授業を実践する上で最も重要な手立ては「教師が面白がる」ことである。人は誰かが自分の考えに興味をもち，面白がってくれることで「もっとこうしてみよう」という工夫の意欲が湧く。題材ごとに有効な個別の手立てはあるだろうが，音楽科のどの題材にも共通して有効なのがこの「面白がる」だと３年間の実践を振り返って感じる。自分の実践に関しても，それを面白がってくれる同僚や大学の研究協力者の先生，子供たちがいたからこそここまでたどり着けたと思う。

３年間で授業観も大きく変わった。初めは人から評価されることを意識して見栄えの良い授業を目指していた。正解がどこかにあり，その正解を探すことが授業づくりだと考えていたのである。しかし，子供が生き生きと音楽活動に取り組む授業は，流動的で予測ができず，時に泥臭く，必ずと言ってよいほど混沌とする場面がある。混沌は授業の失敗ではなく，子供がそ

の先の学びに進むために必要なプロセスであり，教師の授業づくりのプロセスにも混沌が必要であることに気が付いた。そして正解がないことを前提に，「よりよい授業」のための方策を考えるようになった。このような授業観の変容は手探りで行った「コロナ禍における正解のない授業づくり」も大きく影響していると感じる。以上のように授業観が変容すると，授業づくりは苦しいだけのものから，苦しいけれども面白いものに変わっていった。音楽表現と同様に，授業も結果としての出来栄えだけでなく，そこに至るプロセスを自分が楽しめるようになった。附属小学校での３年間に経験したことを今後も生かしながら，子供たちに学びの保証ができるような授業づくりをこれからも求めていきたい。

５．おわりに

筆者（小塩）は本論文で報告された６つの実践研究のうち，５つの授業を現場で参観した。実践１は「教職体験演習」の引率者として学部１年生の学生と参観したので当日に授業内容を知ったが，実践４～６は研究協力者の立場で授業内容の構想段階から話を聞いた上での参観であった。実践２は授業終了後に記録動画を視聴し，実践３は動画を視聴して大学の授業でもその一部を使用させてもらった。

早坂教諭の授業には共通して以下の特長がある。①掲示物や小物を効果的に使い子供たちの学習意欲を刺激すること，②教師からの問いかけで引き出した子供の発言を生かした授業展開があること，③授業の中で十分な音楽活動の時間が担保されていること，④教師の音楽に対する深い理解と多様な音楽文化に根ざしたさまざまな表現法に対する強い関心が授業での学びを強化していることの４点である。これらは附属小学校着任直後の実践１にも当てはまるもので，附属小着任前の教育経験の中で早坂教諭が作り上げてきたものである。附属小学校での研究の中では，①自分の音楽的・教育的関心と教材開発を結びつけること，②授業公開の結果を真摯に受け止めその後の授業に反映させること，③音楽という教科の特質を考えた授業構成をすること，を特長とする授業を展開した。このような授業展開が可能だったのは，早坂教諭の子供に対する深い観察力と，教科の専門的知識や技能の確かさに拠る。授業研究は１回の授業あるいは１つの単元単位で行われることが多いが，学校における子供の学びは長期的かつ継続的なものである。本論文で，早坂教諭が異なる領域の授業を含む３年間の実践を振り返る中で見えてきた音楽科の授業の在り方についての洞察は，教員養成大学の教員もそれを共有し，今後もともに考えていく必要がある。あわせてこのような洞察の基礎となる音楽に対する深い理解と多様な音楽表現への強い関心を，教員養成大学の学生に４年間で身に付けさせることの重要性も改めて認識する機会となった。

付記

本論文について，開示すべき利益相反関連事項はない。

【参考文献】

文部科学省（2018）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　音楽編．東洋館出版社（東京）．

日本ビクター（1988）音と映像による　世界民族音楽大系８：東南アジア篇　マレーシア・フィリピン．日本ビクター株式会社（東京）．

高倉弘光（2012）〔共通事項が見える〕子どもがときめく音楽授業づくり．東洋館出版社（東京）．